
亡霊の訪問

ostrich

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

亡霊の訪問

【Nコード】

N7080K

【作者名】

ostrich

【あらすじ】

インターホンが鳴ったのでドアを開けると幽霊がいた。

インターホンが鳴ったのでドアを開けると幽霊がいた。

僕は困惑して言葉が出なかった。しばらく、黙って立っていた。そうしているうちに、実は相手も同じく困惑しているのだということに気付いた。

綺麗な女の人の幽霊だった。ただ、服装は一昔前のものと思った。

「あなたは……」

幽霊はようやく口を開いた。優しい声だった。

「お友達ですか？」

その言葉の意味は分からなかった。僕が応えないでいると、幽霊はさらに困った顔をした。

「彼はどこにいるんですか」

彼とは誰のことだろう、と考えたが、少し経って分かった。この人は幽霊なのだ。多分、この人にとって生前大切だった人のことを指しているのだろう。

そう気付くと、急に僕の胸は苦しくなった。何だって、赤の他人の僕がそんなに悲しいことを言わなければならないのだろう。

「彼を……、出してください。約束したんです。会わないと、死んでしまうかもしれない。好きだったから」

これは全くの憶測だが、多分二人は同時に不幸に遭ったのだ。そしてこの人は、何にも気付いていないのだ。

「ここは、その彼の家だったんですね」

僕は幽霊に言った。

「はい」

「残念ながら、彼はもうここにはいません」

「どうして」

「もう、あなたが死んでからかなりの時が過ぎてしまったから」
僕の言葉に、幽霊ははっとしたような顔をした。

この安いアパートに、何十年か昔、その彼は暮らしていて、この幽霊と幸せな時間を送っていたのだろう。

「なんだ、もう会えないのか」

幽霊は言った。涙が床にこぼれた。

「分かっているけどね」

幽霊は涙を拭って言った。それから寂しげに笑った。

「泣いてもいいと思いますよ」

「ありがとう」

それから幽霊は遠慮せずに泣いた。
しばらくして幽霊は落ち着いた。

「もう、来ることもないですね」

幽霊は僕に会釈すると、階段を降りていった。靴音を立てながら。
幽霊のルール——どうしたら成仏するとか、行動範囲はどれくらいだとか——を僕は知らない。しかし、可哀そうだけれどあの人は、その彼には会えないような気がした。

それだけの出来事だったけれど、僕は、いつか僕に大切な人が出来たとき、その人が僕の居場所を知らないなんてことにはしたくないと思った。

(後書き)

ありきたりな話だとは思いますが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7080k/>

亡霊の訪問

2010年10月11日12時01分発行